

「うく・うかぶ」

かとうよういち

1.

たとえば、「木は水にうく」という言い方がある。この場合に、「うく」の代わりに「うかぶ」を使ったとしても、我々は、変らぬ意味をそこから受け取ることができる。けれども、ある場面においては、我々は「うく」と「うかぶ」とを使い分けているようでもある。そこで、ここでは、この「うく」と「うかぶ」とについて考察してみたい。

『分類語彙表』によれば、「うく」と「うかぶ」は「うかべる」・「うかびあがる」・「うきあがる」・「うきだす」とともに、2.154₁・浮き沈みに分類されている。

『三省堂国語辞典』（金田一春彦）、及び『広辞苑』の「うく」・「うかぶ」の項には、次のように記述されている。

「うく」

- 一、底から離れ（てあが）る。
- 二、水の上にあらわれる。
- 三、定まらないで動く。
- 四、うきあがるような感じがする。
- 五、あまる。

六、心がうきうきする。

（三省堂）

- 一、物が沈まないで水面または水中にある。
- 二、物が水中から水面に出てくる。

三、表面へ現われる。

四、着く所がなく漂う。

五、根拠がない。確がでない。あてにならない。

六、心が落ち着かずふらふらする。

七、軽々しい。軽薄である。

八、気が引き立つ。陽気になる。

九、歯が浮き上がるような気がする。

十、打った釘などがきいてない。

十一、余分ができる。

(広辞苑)

「うかぶ」

一、底から離れてあがる。

二、水の上にあらわれる。

三、おちないで空中にとまる。

四、表にあらわれる。

五、思い出される。

六、成仏する。

(三省堂)

一、沈まずに水面または水中・空中などにある。

二、動いて定まらない。落ちつかない。よりどころがない。

三、根拠がない。いりかげんである。うわつく。

四、水中から水面の方に出てくる。

五、苦しい環境から逃れる。

六、出世する。立身する。

七、亡者の霊が成仏する。

八、心によしと思う。甘心する。快く思う。

九、思い出される。

(広辞苑)

2.

「うく」と「うかぶ」は、固体の上にしっかり自分をささえ、移動するのではなく、気体や液体のなかをささえなしに、上方に向けて移動する過程、また、その結果として

の状態をあらわす。

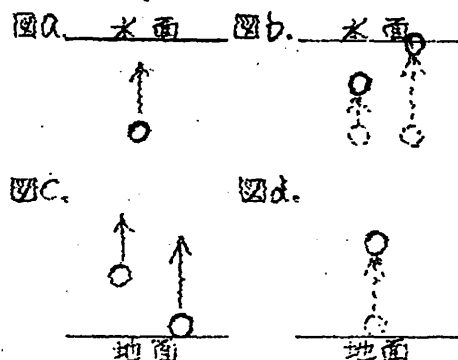
- (1) 呼吸をするために、魚が水面に うく。
- (2) 呼吸をするために、魚が水面に うかぶ。
- (3) 一度沈んだ箱が、再び水面に うく。
- (4) 一度沈んだ箱が、再び水面に うかぶ。
- (5) 海底から気泡が、海面に うく。
- (6) 海底から気泡が、海面に うかぶ。
- (7) 死体が、水面に うく。
- (8) 死体が、水面に うかぶ。
- (9) 船の廃油が、海面に うく。
- (10) 船の廃油が、海面に うかぶ。
- (11) 木の葉が、水面に うく。
- (12) 木の葉が、水面に うかぶ。
- (13) 板きれが、水面に うく。
- (14) 板きれが、水面に うかぶ。
- (15)? 小舟が、水面に うく。
- (16) 小舟が、水面に うかぶ。
- (17)^x ボートが、波間に うく。
- (18) ボートが、波間に うかぶ。
- (19)^x 奇妙な物体が、水中に うく。
- (20) 奇妙な物体が、水中に うかぶ。
- (21) フワリと体が、宙に うく。
- (22) フワリと体が、宙に うかぶ。
- (23) 綱を切られて気球が、宙に うく。
- (24) 綱を切られて気球が、宙に うかぶ。
- (25) アドバルーンが、空に うく。
- (26) アドバルーンが、空に うかぶ。
- (27) タンポポの種が、空に うく。

(28) タンポポの種が、空にうかぶ。

(29) 雲が、空にうく。

(30) 雲が、空にうかぶ。

液体のなかで上方へ移動する動作を考えてみると、その過程は図aのようになり、結果は図bのように、完全に水面まで達した場合と、途中で停止し、漂っている場合とが想像される。



一方、気体では、過程は図cのようになり、結果は図dのように、ただ一つの場合だけが考えられる。

用例のなかで、図bの場合をあらわしているのは、(18)と(20)、そして、「小舟が図aのような移動をするとは考えにくい」ので(16)である。

また、図dの場合をあらわしているのは、雲が図cのような移動をするとは考えられないので、(30)である。

しかし、他の用例の場合、それが図a、図cのような移動の過程をあらわしているのか、図b、図dのような結果としての状態をあらわしているのかの判断はできない。

明らかに過程をあらわす語として、「うきあがる」・「うかびあがる」が存在するのは、このためではなからうか。

結果としての状態をあらわすとき、(17)・(19)のように「うく」が使えず、過程をあらわすとは思えないとき、(15)・(21)のように「うく」を使いにくい。このことから、「うく」よりも「うかぶ」の方が、より状態をあらわすと言えそうな感じを受ける。

「うく」と「うかぶ」は、2で述べた移動とは関係なく
用いられる場合も多い。

- (1) X ライトに、人影ガ うく。
- (2) ライトに、人影ガ うかぶ。
- (3) X 黒地に、白い模様ガ うく。
- (4) 黒地に、白い模様ガ うかぶ。
- (5) X 顔に、汗ガ うく。
- (6) 顔に、汗ガ うかぶ。
- (7) X 目に、涙ガ うく。
- (8) 目に、涙ガ うかぶ。
- (9) X リストに、名前ガ うく。
- (10) リストに、名前ガ うかぶ。
- (11) X 顔に、微笑ガ うく。
- (12) 顔に、微笑ガ うかぶ。
- (13) X 事件の犯人ガ うく。
- (14) 事件の犯人ガ うかぶ。
- (15) X 目に、面影ガ うく。
- (16) 目に、面影ガ うかぶ。
- (17) X 不安な思いガ うく。
- (18) 不安な思いガ うかぶ。

これらはすべて、隠れていたもの、見えなかったもの、
同図と区別できなかったものが、はっきりとあらわれた状
態をあらわす。ここにおいても、2と同じく、「うく」は状態
をあらわす場面では、用いられていない。

- (19) 計画ガ 宙に うく。

(20)? 計画が、宙に うかぶ。

(21) 仲間のなかで彼の存在が、宙に うく。

(22)? 仲間のなかで彼の存在が、宙に うかぶ。

これらは、本来の枠組から「計画」や「彼」がはずれ、遊離していく過程、あるいはその状態をあらわしているが、2の用制と同じく、どちらであるかは、はっきりしない。また、ここでは、「うかぶ」は使いにくい。

(23) 釘が、うく。

(24)×釘が、うかぶ。

(25) 歯が、うく。

(26)×歯が、うかぶ。

(27) 資金が、うく。

(28)×資金が、うかぶ。

これらは、(19)・(21)よりもさらにはっきりと、基部からの遊離をあらわしている。ここでは、「うかぶ」を使うことはできなくなっている。

このほかの用制として、次のようなものがある。

(29) 仏が うかばれる。

(30) 身を捨てて うかぶ 瀬。

(31) ういた 噂。

(32) うき 名。

(33) ういて うかれて。

(34) うかない 顔。

(35) 喜びに うかれる。

(36) 人生の うき 沈み。

(30)・(36)は、2でとりあげた用例を、比喩的に用いていると考えられる。(31)~(35)は、心が本来の状態から離れている場合と考えられる。(29)は、亡者として淀みに沈んでいた壺がうかばれるということではないだろうか。

4.

以上、分析の結果から、「うく」の中心的意義特徴を〈基部からの遊離〉に、「うかぶ」の中心的意義特徴を〈はっきりあらわれること〉において捕えたい。

2の用例で、液体の場合、「うく」というとき、液体が基部であり、それから物体が遊離しつつあると考える。気体の場合は、地面を基部と考える。

「うかぶ」では、液体の場合、水面に物体が近づくことによってはっきりとあらわれ、気体の場合は、空にあがることによって、空という面のなかに、物体がはっきりとあらわれると考える。したがって、物体が空のなかに吸い込まれていくように上がっていくとき、「うかぶ」は使えない。

また、「うかぶ」の方がより状態をあらわし、「うく」は積極的に状態をあらわさないように思える点については、まだ問題がありそうである。

なお『類義語辞典』には、「うく」・「水中、空気中等を下から上へと移動する」~「移動の結果、基部から遊離した状態になる」、「うかぶ」・「水上、空気中、物の表面等に姿を現わし」「きわ立って見える」とある。

参考文献

- 国立国語研究所『動詞の意味・用法の記述的研究』1972 秀英出版
国立国語研究所『分類語彙表』1964 秀英出版
宮島達夫・徳川宗賢『類義語辞典』1972 東京堂出版
言語経歴：1955年1月 福岡県北九州市若松区生。